

「*Helicobacter pylori* と胃炎・胃癌」

自治医科大学教授・消化器内科 木村 健 編集
東京都立駒込病院内視鏡科医長 榊 信廣

東京女子医科大学・成人医学センター

竹 本 忠 良

この本の共編者は2人とも、私と強いつながりを持っているので、書評をする私は大きな弱味を持っている。できれば、一般の臨床医の立場に立って読んでみたいと思ったが、この私に“平均的な消化器病医”の水準がわかるはずがない。このごろは、消化器の学会・研究会などいたるところで、*Helicobacter pylori* (以下 *H. pylori*) の講演・シンポジウムが行われていて、既に水準の低い企画などそっぽを向かれている。その点、*H. pylori* の理解に必要な最新知識は網羅したにもかかわらず、あえて主題を胃炎・胃癌に置いたことをまず評価したい。正確な視点であり、最も適した編者であったと言える。冴えた頭脳を持ち、健筆でも知られる木村健教授を今更ここに紹介しないが、榊信廣博士はもと山口大学第1内科におり、木村教授と同様に胃炎の内視鏡研究を得意としていて、かつ早くから *H. Pylori* の研究

を手がけた人である。榊信廣博士が論文を書く様子はそう器用とは言えないが、評論家であった唐木順三がかつてみずから書いたように“読んでは書き、書いては考え、考えてはまた読む”という執筆ぶりを通した人だ。

この *H. Pylori* の本も、唐木のいった“鉤脈発掘作業”にも似て、*H. pylori* 研究の最終目標に向かっていかに独自の道を歩むか、*H. pylori* と胃炎・胃癌との関連を明白に証明するために今後どのような追求が必要なのか示したものである。彼らの、永く日本の胃炎・早期胃癌の内視鏡研究を勉強してきたという重い使命感が、この *H. pylori* 研究の最大鉤脈への挑戦ルートを模索させ、見事なこの本を編ませたものと受け止めている。みずから外国の *H. pylori* 研究者が持っていない視点に立っていて、日本の今後の *H. pylori* 研究のありかたを明確に示していると重

ねて書いておこう。力作である終章の“*H. Pylori* と胃炎・胃癌—将来の展望”は、欧米追従に終始した業績の多いわが国の研究への正に警世の文でもあろう。

最後に余計なことを書いておくが、このたびサンフランシスコのDDWに参加し、学会の展示場で新刊のLeeとMégraud編集の“*Helicobacter Pylori*” (Saunders) をたった48ドルで求めた。305頁の製本も堂々とした本で、*H. pylori* 研究者にとって必読の本である。つまり、東西呼応して、水準の極めて高い *H. pylori* の本が出たことになる。医学書院の大胆な企画と実行力に敬意を払うとともに、この本の単価が数千円程度になるよう、一段と企業努力をお願いしたい。

● B5 頁236 図71 写真18 原色図
85 表65 1996 定価11,845円(税込)
〒400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)